

企画にあたって

室生 卓（みどり病院心臓弁膜症センター内科/院長）

今医療の現場では、ありとあらゆる情報が手に入ります。心不全を例に挙げるならば左室駆出率、左室容積、左房容積はいうに及ばず、拡張能指標やストレイン値、もちろんBNPも簡単にわかります。しかしCTやエコー、MRI、血液から得られるこれらの情報が万能かといえば、そうではありません。いつでも即座に手に入るというわけにはいきませんし、他の検査所見と矛盾しているからといって簡単にやり直しがきくものでもありません。一方で、Physical Examinationにはいろいろな限界がありますが、bedsideでいつでも情報が得られ、ほかの所見と矛盾があれば何度でも所見を取り直すこともできます。トレーニングを積みばおのずから診断精度が上がりますし、限界や適応もつかめてきます。自分の手と目と耳で直に得られるPhysical Examinationに「確かな手応え」を感じることができるようになります。そして何より、bedsideへ行くのが楽しみになります。しかし、Physical Examinationのなかには古典的で現代医療にそぐわないものも少なくありません。本企画を通じて、現代医療に即した形でPhysical Examinationを見直し、これから循環器診療を担う若い読者に提供するという目的で本特集を企画しました。

『診る』では、最も遭遇する機会の多い循環器疾患である心不全と弁膜症に関して、診察のコツを概説していただきました。また、しばしば臨床で見逃されたり、評価に難渋する心タンポナーデと収縮性心膜炎、右心不全に関して「診方」を概説していただきました。また、今後患者の増加が確実視される成人の先天性心疾患、高齢化社会の到来とともに問題となっている血管疾患についても概説していただきました。

『識る』では、とかく聴診に頼りがちな循環器診療において「触診」「視診」の重要性を強調していただくとともに、「聴診」の有用性を改めて概説していただきました。

『治す』では、実際の治療選択において身体所見がどのように活用されているかを、心不全、弁膜症について概説していただき、さらに実際の症例を挙げて解説を加えていただきました。

本企画を通じてPhysical Examinationが有効な診療手段として臨床の現場で活用され、読者の方々の日常診療の一助となることを期待しております。